（資　料）

С・Г・ストルミリン

共産主義と分業

Академик С. Г. Струмилин
Коммунизм и разделение труда
(《Вопросы философии》 1963 г. No. 3. стр. 37—49)

マルクス・レーニン主義の創始者たちは、共産主義の勝利が分業の廃絶をもたらし、人間個性の全面的で調和的な発達を保障するという見解の断固たる支持者であった。共産主義にいたる途上でこれらの目標が不可分に連関していることも明白である。多少ともせまい専門をともなういっさいの職業的分業は、人間を彼のえらんだ専門に1生涯のあいだ不可避的にしばりつけ、せいぜいこの専門の枠内で人間の一面的発達をゆるすにすぎないのではないのか。だがこのことは、可能なかぎり広い全面的な発達という共産主義的理想と原理的に矛盾している。それにもかかわらず、個人崇拝の時代には、分業にかんするマルクス主義の古典家たちの思想は，ソヴェトの経済学者の若干のサークルのなかで改作されていたのである。1947年にある学位志願者が自己の学位論文のなかで、共産主義のもとでの分業の廃絶にかんする思想をきわめて精力的に擁護したが、彼によってこの思想がマルクス主義の精神で扱われたにもかかわらず、そのとき学術審査会議は、2分の1の声をのぞいて、概してはなはだ重要かつ良質のこの学位論文をみじめに失敗させたのである。

600万部弱の部数を出版し、あらゆる審判によって是認された最初のソヴェト経済学教科書のなかですでに、簡潔に、しかし明瞭に、つぎのようにのべられたのではなかったか。「共産主義は、ふるい分業をとりのぞきはするが、けっして分業の必要を否定しはしない。」(《Политическая экономия, Учебник》 М., 1954, стр. 566. Разрядка моя.—С. С., 邦訳「経済学教科書」1955年，合同出版社、952ページ、傍点は C. ストルミリンによる)　新しい教科書には、この新奇な着想のどのような理由づけもふくまれてはいない。共産主義の勝利とともに1面的分業にかわって登場する「労働変換」法則については、そこでは言及さえされなかった。

そのときから少なからぬ年月が経過した。そして新しい状況のもとに、すでに「哲学の諸問題」誌において、われわれはふたたびこの問題にたちかえっている。おそらくこれはまったく時宜にかなっていよう。開始された討論のなかで、A. K. クルィレフはひとつの立場をのべ、分業の「絶滅にかんする」K. マルクスおよび F. エンゲルスの言説を引用した。「このような言及が実際にあるという事実を誰も否定できない」と彼はのべている。しかし、この言及を「注意ぶかく」考えてみるといいながら、A. クルィレフはつぎ

のようなかなり意外な結論に到達するのである。「それは資本主義的分業制度にかんするものである」(А. К. Курылев 《Разделение труда и всестороннее развитие личности в период перехода от социализма к коммунизму》. 《Вопросы Философии》 No. 10, 1962, стр. 22). かくして、クルィレフによれば，マルクスが言及したのは資本主義経済における分業の廃絶にたいしてであって、共産主義の諸条件とはかかわりがない，ということになる。しかしこれは明白な思いちがいである。というのは論争はまさに共産主義のもとで分業があるかないかということをめぐっておこなわれているのであり、クルィレフは、共産主義のもとでも、個性の全面的発達を排除しないような新しい形態においてのみではあるが、分業は存在するといいたいのである。

多くの論争参加者は、この立場を支持している。

他の著者たちも、分業の永久的必然性を擁護している (А. Б. Андреев, Я. В. Тимошков 《Разделение труда и общественные группы при коммунизме》 《Вопросы Философии》 No. 10, 1962, стр. 41—44). 彼らはつぎのようにのべている。「生産力の発展は、分業の発展を土台としている。分業およびいっそうせまく深い人々の専門性の将来の発展なしに、生産力の発展を考えることはできない……。したがって，生産力の嵐のような発展をもって特徴づけられる共産主義社会にとっては、分業の廃絶を語ることはできないし、共産主義社会の人間を各種の労働形態をかわるがわる遂行するものとして表象する空想的 (?!) シェーマへの移行について語ることはできない」(стр. 42).

共産主義のもとでも分業は残ると考え、マルクスによって立てられた労働変換法則をもこれと結びつけることをいとわないクルィレフに反対して、アンドレーエフとチモシコフは、うらやましいばかりの勇気をもって、「マルクスは、そんな法則を立てはしなかった……」と主張している。それどころか、彼らは、好結果をもたらすような労働変換の必要さえ認めない。というのは、「せまい専門化は、けっして個人を奴隷化しないし、能力にふさわしい労働を選択する可能性を減らしはしない」からである。「たえまなく発展し深まってゆく分業なしに共産主義社会を考えることができないことは、まったく明らかである」(стр. 43) とこれらの同志たちは主張している。このような構想の断固たる支持者が、「哲学の諸問題」誌上に、こんどなおどれだけたくさんあらわれるかはわからない。しかし、わが国のインテリゲンツィヤのなかには、こんにちなおこうした人々が少なくないことはうたがいない。

マルクスは、「労働者のできるだけ大きな多面性」の利益のために「労働変換」法則を立て、それを「一般的な社会的生産法則」と名づけたのではなかったのだろうか？ むろん、そうである。マルクスは、「ひとつの社会的細部機能の担い手にすぎない部分個人の代わりに、種々の社会的機能を自分の種々の活動様式としてかわるがわる行なうような全体的に発達した個人をもってくる」という課題を、死活の問題として提起したのではなかったのだろうか？ しかり、提起したのである。彼は、「労働者階級による不可避的

な政権奪取」を予見し、「古い分業の廃棄」を予見したのではなかったのだろうか？　しかり、予見したのである。これについては、彼の最初期の著作のなかだけでなく、もっとも成熟したもっとも完成された著作のひとつである「資本論」第1部のなかにもみうけられる（К. Маркс и Ф. Энгельс. Соч., Т. 23, 1960, стр. 498—499, Разрядка моя.—С. С. 邦訳「資本論」，1961年、大月書店、第1巻第3分冊、291～292ページ、傍点はC.ストルミリンによる）天才的予見者のこれらの思想のあれやこれやを「ユトーピア」として鼻であしらいながら疑問をさしはさもうとするものは、みずからの兵器庫のなかに、共産主義社会においては何が「考えうるもの」であり、あるいは何が「考えられないもの」であるかのはっきりした誰でも納得させられる何らかのまじめな引証をもつべきであろう。

A.クルィレフは、ますますせまい労働の専門化が将来とも深化してゆくのは永久不変の必要であるという思想を信奉するさいに、それほど首尾一貫してはいない。いずれにしても、彼は自分をまもるために、労働の変換のかわりに「骨化した専門をともなう古い分業」（マルクス）の方を採ることを腹にきめかねている。しかし、彼はやはり、この論争においてマルクスその人に助けを求めつつ、マルクスに反対して、共産主義の条件においてすら分業を永久化しようと努力している。クルィレフは、マルクスのなかに自分にとって危険な引用をみつけるが、マルクスの高い権威によりかかって、この本源的論戦～マルクス対マルクス～を、きわめて簡単に、優雅に、自分自身の構想に有利に解決するのである。

事実、クルィレフは、共産主義のもとでの分業の必然性にかんする自己の思想をマルクスからのつぎの引用と結びつけている。「社会的労働を一定の割合で分割（разделение）するこの必然性は、社会的生産の一定の形態によってなくされるものではなくて、ただそのあらわれかたがかわるにすぎないことは自明である」。この1句は、ルードヴィヒ・クーゲルマンにあてた1868年7月1日づけのマルクスの大へん有名な手紙から抜きとられたものであるが、ここで論じられているのは社会的欲望の量に照応する労働の配分比率についてであり、階級社会ではこの比率が自然発生的な価値法則によって規制されるのにたいして、社会主義と共産主義のもとではそれは国民経済計画によって意識的に設定される、ということである。だが残念なことには、クルイレフによって引用されたマルクスからの1句は、すぐさまひとつのきわめて本質的な欠点を暴露してしまうのである。マルクスによって下線で強調された言葉「распределение труда〔労働配分〕」の代りに、彼のひいた引用文では「разделение труда〔分業〕」がおかれている。

しかし、つぎのことは注意する必要がある。マルクス・エンゲルス著作集第25巻にあるルードヴィヒ・クーゲルマンあての手紙のロシア語訳は、1934年においてすでにドイツ語原本に十分照合されていたのであり、この点は国際版ドイツ語テキストとこのロシア語訳とを照合してみれば容易にわかる（См. Karl Marx, Briefe an Kugelmann. Berlin, 1924, S. 45). しかし、1947年には、われわれは、新しいロシア語訳のなかですでに改訂された

訳文でこの手紙を見出したのであってA・クルイレフはここから引用しているのである(К. Маркс, Ф. Энгельс. Избранные письма, 1947, стр. 208). クーゲルマンあてのマルクスの同じ手紙を故意に正しくない同様の新しい文案で訳載した別の版も存在している(К. Маркс, Ф. Энгельс. Письма о《Капитале》, 1948, стр. 160). この手紙を改版するさいに、天才的教師の言説の正真正銘のテキストを意識的にゆがめるとは、これはいったいだれにとって何のために必要だったのか、という疑問が不本意ながら生ずるのである。

古典の再版にあたっては、それのほん訳は、いっそう適確な表現を採用し、旧版で明らかとなったまちがいを免がれるように修正される、ということはわかりきったことである。しかし、初版マルクス・エンゲルス著作集第25巻におけるこの手紙のほん訳の正確さについては、いささかの疑問も生じない。マルクスにあっては「разделение труда〔分業〕」という概念がつねにTeilung der Arbeitというタームに相当しており、労働、生産物あるいは富のРаспределение〔分配〕という概念を表現するためにはいつもVerteilungという語を用いていた、ということを納得するには、《資本論》のロシア語版テキストを最新のドイツ語版と対比してみればかんたんである(См. например, 《Капитал》, Т. 1: по второму изданию Сочнений К. Маркса и Ф. Энгельса т. 23, стр. 89, 348, 363 368, 376, 431, 498, 499, и Karl Marx《Das Kapital》, b. 1, Berlin, 1951, Ss. 84, 352, 368 373, 381, 441, 513, 514). これらのタームのひびきが似ているとしても、それの意味がまるでちがっていることはまったく明らかである。クーゲルマンあての手紙から引用するさいには、「Разделение труда」というタームは、文字どおり出まかせに言っているのである。

過去からひきついだ古いせまい職業的分業のような基本的概念およびわれわれが未来にも予見するような労働配分におけるのぞましいつりあいにたいしてさらにくわしくふれることは、当面の問題の一般的解決もまたこれらの点のさまざまな取扱いに依存しているが故に、まさに必要である。

分業について普及している理解は、はなはだ広汎なものである。世界的規模での国際分業とか、国内での地域的分業とかについて語られている。社会内部の分業たとえば部門間つりあいという断面での社会内分業を、工場内の「個別的」分業から区別する必要がある。後者は、個々人の生活活動の範囲を不可避的に限界づけるところの労働機能の職業的ならびに細目的な専門化である。自然的分業——性と年令による分業——と、都市と農村、肉体労働と精神労働および労働一般と資本とのあいだの深まりゆく対立の増大をともなう種々の発展段階における社会的分業とは、区別されている。そして、これらすべてのことなった分業種目および亜種目が、それぞれのきたるべき運命において、分ちがたく一体化しているものとして考察できないのはもちろんである。

たとえばマルクスは、社会内部の社会的分業とマニュファクチュア内部の職業的分業とは、たんにことなっているだけでなく、「相反する出発点から発展する」とさえいってい

る（К. Маркс и Ф. Энгельс. Соч., т. 23, 1960, стр. 364, 邦訳「資本論」、1961年、大月書店、第1巻第3分冊、71ページ）。マルクスが、分業をはじまりだけでなく一定の完全な終末をもつ歴史的過程として考察しながら、部分労働者の極端な職業的専門化のうちにまさに資本主義のもとで労働者を片輪にしてしまう分業の極点を見出したことは疑いないところである。だから、はなはだ広い分業概念は、マルクスにおけるこのタームのより**せまい意味**では、その特質の上述のようなせまい職業的取扱いに、まさに帰着するのである。

このことは、注におけるスカルベクからのマルクスの引用によってもたしかめられる。スカルベクもまた、「作業分割または**本来の意味**での分業とも呼べるもので、個々の作業や職業のなかでつくりだされ」るものを発見していた。この特質をいっそう正確に表現するために、マルクスは、ついでながら、ドクター・ユーアのつぎの定義を引用している。「それぞれの特殊作業への労働者の適合は、分業の本質をなす」（Там же, стр. 362,364. Разрадка мое.—С. С. 邦訳「資本論」、1961年、大月書店、第1巻第3分冊、69、71ページ、傍点はC.ストルミリンによる）。「終生にわたる労働者の細部作業への拘束、資本のもとへの部分労働者の無条件的従属」（Там же, стр. 369. 邦訳、同、77ページ）を規定するところの分業のこの本質にてらしてみるならば、分業とよびうるもののすべてが、われわれにとっていとうべきこうした本質をもつものではない、ということは明らかである。

だからマルクスが、労働の「разделение〔分割〕」とならんで他の専門的ターム——労働の「распределение〔分配〕」——を導入し、本質的なちがいがぼやけるのをさけたのは偶然ではない。「ある種の精神的肉体的不具化は、社会全体の分業からさえも不可避である」（Там же, стр. 376. 邦訳、同、90ページ）と、マルクスはのべた。しかし、マニュファクチュア時代はさまざまの労働諸部門の社会的分割をさらにいっそう推しすすめ、ただもっぱらマニュファクチュア分業だけがはじめて個人をその生活の根底からとらえるのである。だが、固有の意味における共産主義の条件においてすら成長するものでありながら、こうした生活の根底を決しておびやかさず、また個性の全面的発達をおびやかさないような社会的労働の分割およびつりあいについて、意識的に問題とするのであれば、事態はことなる。このようなばあいには、マルクスはつねに労働の「распределение〔配分〕」というタームを用いている。われわれは、このような用語法を拒否する合理的理由を何ひとつもちあわせてはいない。

とくにクーゲルマンあてのマルクスの手紙において、まさにこのようなばあいが生じたのである。そして、もしクルイレフがこの手紙の文脈をひきちぎらずに、より正確な形で引用していたならば、そのほんとうの意味がいっそうはっきりしたことだろう。実際のところ、マルクスがこの手紙でかいたことはこうである。「いかなる国民でも、1年間はおろか2、3週間でも労働を停止しようものなら、たちまちまいってしまうということは、どんな子供でも知っている。また種々の欲望の量に応じる諸生産物の量は、社会的総労働

の種々のそして特定の分量を必要とするということもどんな子供でも知っていることである。このように社会的労働を一定の割合で配分する必要は、社会的生産の一定の形態によってなくされるものではなくて、ただそのあらわれかたがかわるにすぎないことは自明である」(К. Маркс и Ф. Энгельс. Соч., т. XXV, 1934, стр. 524—525, 邦訳、「クーゲルマンへの手紙」、1954年、大月書店、87～88ページ)。

この文脈からまったく明らかなように、問題は、労働の分割あるいは何らかの労働専門化にかかわっているのではなく、総労働量を社会的欲望に比例的に配分することである。そしてこれは、共産主義の条件においても必要である。ところがA，クルイレフは、マルクスからの引用によって、共産主義のもとでまさに「職業的分業」が将来ともきっと保持されるという自己の思想を強化しようとしているのであり、そのさい彼は、社会主義的専門化こそが「新しい分業形態」(стр. 24) であると主張し、それをきたるべきいっさいの時代にわたって永遠化しようとしているのである。

もっともA.クルイレフは、一般に、彼が引用する著者のほんとうの論述を、きわめて自己流に扱っている。B.И. レーニンは1920年にすでに、マルクスに完全に賛成して、つぎのように見とおしていた。資本主義が社会主義への遺産としてのこした「職業や職種のうえの差異」と労働組合とは、より広い、同職組合的性質のすくない産業別の組合に発展するであろうが、そのあとで、この産業組合を通じて、「人々のあいだの分業をなくすこと、どの方面の知能も発達した、あらゆる面の訓練をうけた人々、なんでもすることのできる人々を教育し、訓練し、養成するところへうつってゆく」(Соч., Т. 31, 1950, стр 32, 邦訳、レーニン全集、1959年、大月書店、第31巻、35ページ)。ここではすべてが明らかであると思われる。A. クルイレフが奇妙なやり方で利用したテキストのなかでは「人々のあいだの分業の絶滅」にかんするレーニンの予見がまったく脱落し、何ごともなしうる全面的に発達した人間にかんする1行だけが残されたのである (См. 《Вопросы Философии》 No. 10, 1962, стр. 25). いいかえれば、まさにこの討論における論争の対象そのものが脱けおちているのである。

マルクス・レーニン主義の古典からのこのような引用の仕方は、もちろん、著者の仕事をやりやすくしている。だが、英才は自から顕われずにはいない。レーニンにしたがって何ごともなしうる全面的に訓練された人間を教育することが共産主義のもとで現実に可能となることを認めてしまったクルイレフは、共産主義の高度の段階において、つまり、マルクスの言うところでは「人間を奴隷化する分業への従属がなくなったのちには」(К. Маркс и Ф. Энгельс. Соч., Т. 19, 1961, стр. 20, 邦訳、「マルクス・エンゲルス選集」、1950年、大月書店、第9巻、下、360ページ)、新しい分業、新しい労働専門化の必然性を証明するいっさいの理由を失っているからである。職業をあわせもつこと〔совмещение професеий〕が増加しているという事実は、げんざいすでにこの方向へのひとつの道を示している。職業をあわせもつことは、労働者の生産上の生活範囲を、たったひとつの特殊的専門だけにせばめないで、むしろそれを何ごともなしうるまでにおしひろげて

ゆくのである。労働者の機能のこのような新しい拡張を、彼の職業的仕事の古い専門化の道として扱うことが、概念のあやまれる使用なくしてはたしてできるだろうか？

なるほど、クルイレフにはさらにひとつのたすけ船となる引用のもちあわせがある。彼はレーニンを引用しつつ、労働の専門化が、「その本質上、技術の発展と同じように限りないものである」(стр. 24) と主張している。前後の文脈からきりはなされたこのわずか1行は、もちろんさまざまに解釈できる。だが、われわれはすでに、マルクスと同じくレーニンもまた職業的分業や労働専門化の一定の終末を見ぬいていたことを知ったのである。しかもなおレーニンが、技術の発展と関連して際限のない労働の専門化について語っているとすれば、彼がまったく別のことを念頭においていることは疑いない。実際には、彼は、同じところで自分の思想をつぎのように説明している。「たとえば、総生産物のうちのある1小部分の生産にむけられている人間労働の生産性が高まるためには、この小部分の生産が専門化されること、すなわち、その生産が、大量生産物をとりあつかい、それゆえにまた機械、等々の使用を可能にする（そして呼びおこす）特殊な生産となることが、必要である。これが1面である。だが、他面では、資本主義社会における技術の進歩は、労働の社会化にある。ところで、この社会化は、生産過程の各種の機能の専門化を必然的に要求する」(В. И. Ленин, Полн. собр. соч., Т. 1. 1958, стр. 95. Разрядка моя—С. С., 邦訳、「レーニン全集」1953年、大月書店、第1巻、97ページ、傍点はC.ストルミリンによる)。引用したところからすでにわかるように、そもそもここで論じられているのは、職業的分業や労働の専門化についてではなく、実際上その結末が予知されない技術進歩と関連しての生産諸機能の専門化についてなのである。

分業における生産的諸機能の専門化と技術とのこうした連関にかんする問題にたいしては、マルクスもまた彼の著作のなかで1度ならずたちかえっている。彼は、分業にもとずく協業の諸形態が本質的に変化するのは「いつでも労働用具の革命の結果にほかならない」(К. Маркс, Ф. Энгельс. Соч., Т. 23, 1960, стр. 376, 邦訳「資本論」、1961年、大月書店、第1巻第3分冊、91ページ）ことをわれわれに教えている。マニュファクチュア分業は、労働を、そのかんたんな構成要素に分解して、機械が手労働をとらえるのをたやすくする。そして、完全な産業革命をなしとげた機械工業の最初の勝利がすでに、いっさいの労働遂行用具を労働者の手からしだいにとりあげたのであり、それと同時に、手工業的専門のすべての機能と職業的熟練から労働者を解放したのである。「自動工場における分業を特色づけるものは、そこでは労働が専門という特性をいっさい喪失してしまったということである。ところで、いっさいの特殊的発展が停止するやいなや、普遍性の欲求が、個人の全体的な発展への傾向が、感知されはじめる。自動工場は職業と職業白痴とを抹殺する」——マルクスは、すでに1847年に、プルードンの「哲学の貧困」にかんする著作のなかで、まさにこのように主張したのである (Соч., Т. 4, 1955, стр. 160. Разрядка моя—С. С., 邦訳、「マルクス＝エンゲルス選集」1950年、大月書店、第1巻、下、410ページ、傍点はC．ストルミリンによる)。そして、「自動工場のこの唯一の革命的側面さえ」理解しなかったプルードンにたいするマルクスの非難は、すでに眼前に認められる

傾向に注意をはらわずに、共産主義的生産のうちにも同じような職業的専門化による「白痴」をすべて完全に保存するためにたたかっているこんにちの若干の哲学者たちにたいしても、考慮すべきであろう。

すでに完全な生産オートメ化という新しい時代に突入し、社会主義のもとで労働者が機械の付属物から全生産過程の主人となっているわれわれの時代には、この新しい技術革命が、職業的専門化を一掃するためのさらにいっそう決定的なものをわれわれにもたらしているのである。

カール．マルクスは、分業形態のこのような交替を、分業の技術的基盤の交替といっしょにして洞察した。「作業用具といっしょに——と彼はすでに「資本論」第1巻のなかでのべた——、それを扱う手練も労働者から機械に移る。……こうして、マニュファクチュアにおける分業が基づいている技術的基礎が廃棄される」。マルクスの言葉によれば、機械は「古い分業体系」を技術的にくつがえすのである。とはいえ、古い分業体系は「労働力の搾取手段としてもっといやな形で」(Соч., Т. 23, стр. 431, 433, 邦訳、「資本論」、1961年、大月書店、第1巻第3分冊、183ページ、186ページ）存在しつづけるし、資本によって強化される。だが、こうした機械にかわって、ここに登場してくるのが、もはや何らの人間の助力なしに必要ないっさいの運動を遂行し、たんに労働者の側からのコントロールだけを必要とするような自動機械体系という新しい技術である。まさにこのような新しい技術的基礎の上で、「分業」はふたたびその一連の属性を失うのである。

「自動的な工場のなかで分業が再現するかぎりでは、それは、——マルクスの規定によれば——まず第1に、特殊化された機械のあいだに労働者を配分することであり、また労働者群といっても編成された組をなしてはいない群を工場の種々の部門に配分することであって、そこでは、これらの労働者群は並列する同種の道具機について作業するのであり、したがって、彼らのあいだでは単に単純な協業が行われるだけである」。そしてさらに、「全機械設備そのものが、多様な、同時に働く、結合された諸機械の1体系をなすかぎり、それに基づく協業もまた、各種の労働者群を各種の機械のあいだに配分することを必要とする。しかし機械経営は、同じ労働者を同じ機能に永続的に適合させることによってこの配分をマニュファチュア的に固定する必要をなくしてしまう。工場の全運動が、労働者からではなく、機械から出発するのだからこそ、労働過程を中断することなしに絶えず人員交替を行うことができるのである」(Там же, стр. 431, 432, 邦訳、同、183、184～185ページ)、みられるように、上に引用したマルクスの論述から結論しうるのは、古い分業体系ということでマルクスが理解しているのは、資本主義的な労働搾取の条件においてすでに機械が技術的にくつがえしてしまったようなマニュファクチュア時代の手工業的な職業専門化以外の何ものでもない、ということである。もっとも発展した形の、つまりオートメ化された形態における工場についてはマルクスは、すでに別の新しい労働分割の特徴を指摘しており、それのために新しいタームを用いているほどである。この新しい分割は、「まずもって」特殊化された機械のあいだへの労働者の配分に帰着することが明

らかにされている。したがって、ここで特殊化されるのはもはや人間ではなく、機械なのである。そしてもしこれらの機械が「同種」ならば、もはや人間ではなく、機械が単純な協業を形成し、もし機械の総体が「異種」機械の体系を形成しているならば、このような機械の協業がすでに複雑な協業であることは明らかである。だが、総じて、機械以前の古い分業と生産オートメ化のもとでの新しい分業とのもっとも重要な区別は、こうしたアプローチにしたがえば、つぎの点に、すなわち、古い分業と協業がなお人間のあいだで実現されていたのにたいして、生産的諸機能の新しい専門化と協業が、おおむね、自動化ラインのうちに編成された機械および機械体系のあいだで実現されるという点に、帰着するのである。

問題のこのような処理はクルイレフにもわかっていたのであるが、彼は、それを「若干のソヴェトの哲学者と経済学者」だけのものとしてしまい、こうしたアプローチの直接の原典であるマルクスの労作にたいする指示を明らかにさけているのである。だが実際には、マルクスのこれらの洞察の天才ぶりには、ただ驚嘆させられるだけである。マルクスの時代は、生産におけるエレクトロニクスやテレメカニクスや現代的サイバネティクスのすべての奇蹟に類するものを、まだまったく知らなかったのではないのか。マルクスには、ヘンリー・フォードのコンベアーによる資本主義的オートメ化の最初の徴候さえ知られないままであった。なるほどオートメ化思想のこうした早産児は、いぜんとして労働者の紋切形の仕事を極度に細分化したり、労働者の肉体的および精神的能力を不可避的に麻痺させてしまう「車輪上のマニュファクチュア」のひとつの原型を示したのであるが、しかもなおさいきんまでは、こうした徴候がまったく労働の合理化と労働の科学的組織化の少なからぬひな型と考えられていたのである。それ相応の職区で生産上の単純協業の形でならび立つ紡績機械とかいわゆる自動織機とかに類する個々の半自動化機械だけが、マルクスと同時代のものであった。それにもかかわらずマルクスは、複雑な協業によって連絡する多様な、同時的に作動する組合せられた機械——それはこんにちはじめて、結合された自動化ラインと自動化工場とおいて編成されている——のまったく完結した体系を洞察したのである。

しかし当時はまだ、このような異種機械の協業が要求するのは、異種機械のあいだへの異種労働者グループの「配分」であると考えられていた。現代の実践のなかで、われわれはすでに、異種生産物を生産しながら、「オペレーター」と「調整工」だけの同種職員をもつ自動化ラインの完全な職区を知っている。精神労働と肉体労働とにわけることができないこれらふたつの仕事が高い熟練度をもつならば、これらふたつの仕事をひとりの人間のうちに共存させることを妨げるものは何もない。そして、これらの相ことなる労働機能がこのように共存するばあいには——それは、社会主義諸国のすべてのオートメ化された産業の範囲内での労働者の自由な交替と任意の労働変換をともなう——、もはや旧来の分業から残されるものはまったく何もないのである。ことなった時間にさまざまの職務を遂行するような生産者たちは、専門によって分割されることはないし、ただあれこれの比率

で自分の労働時間を配分するだけではないのか。そして彼らの前には、専門化のかわりにまったく反対の道が——個性の多面的発達にむかう道がひらかれるのである。

自動化機構を直接利用するために現実に必要とされるのはきわめて少数のオペレーターと調整工であるとはいっても、自動化機構に奉仕する各種の熟練した補助人員はさらにずっと多く必要である、ということをわれわれは想起することができる。たとえば、巨大なドニエプル水力発電所では、1959年に、本質において監視機能だけを遂行する全「交替要員」が1交替6名をこえなかったが、修理およびその他の助手をふくむ発電所の職員はぜんぶで176名に達したのである。ここから一見したところ、機械の修理のためにはいまのところ、自動化生産における機械の使用自体よりもはるかに多くの労働力を要する、ということがわかる。しかし、このことは、何よりもまず、各企業における修理作業の組織がこんにちなお半ば家内工業的であるという欠陥によって説明される。予備部品が集中的に生産され、それが全企業に十分供給されるときには、部分的修理は、主として磨耗した部品を新しいものととりかえるだけになるし、このために要する職員は大いに減少する。その職員構成全体は、ただ、たいていは鍛治工と旋盤工のうでをもちあわせている熟練した機械工のグループと経験ゆたかな電気工事技師のグループだけにかぎられよう。そこで、これらの職業の3つ4つを十分たやすくあわせもつときには、すでにこの分野において実際に何でもできるような人間があらわれるのである。

かくして、労働の搾取をゆるさない社会主義の条件においては、もっとも先進的な自動化技術のまったく客観的な要求が、機械化された生産に従事する職員の種々の専門の数を増加させずに、むしろ減少させる、ということは明白である。それとともに、手労働による生産が機械によっていっそう精力的に駆逐されてゆく。われわれの生活行動を1生涯にわたって限界づける固定した職業と専門の範囲はまだきわめて広いが、しかしそれはすでに縮小しつつある。それに加えて、労働者層における一般教養と専門教養の水準が上昇するにつれて、ある専門の修得やある専門から他の専門への移行が、はなはだ容易となり、またわが国の実践のなかでは工場幹部の「強流動性〔сверхтекучести〕」においてすら時おりあらわれている。(注) 労働者ひとりびとりの参加する世界と視野がひろがるにつれて、総労働者の固定した専門の範囲がせばまってゆくこの傾向は、すでに、社会主義経済の全生産部面の法則となっている。

(注) ついでながら、ガルニエに代表されるブルジョア科学がすでにずっと以前に、国民教育は「分業の第1の法則」に反するもので、それをやれば、この科学が賛美する「社会制度」全体を滅亡させるおそれがある、という結論に達したことを想起しよう (См. К. Маркс и Ф. Энгельс. Соч., Т. 23, стр. 375, 邦訳「資本論」、同、89ページ参照)

だが、各種の知的生活のあらゆる変種が決定的優位をしめている非生産部面には、なおひじょうに広汎な職業の範囲がのこされている。したがって、肉体労働あるいは精神労働の分野でなおきわめて固定的な「専門化」をともなう生活領域全般に、まさにいとうべき

社会的分業が根絶されずにのこされているのである。しかし、わが国の条件におけるこの「専門化」は、その社会的基盤をうしなっている。すべてのソヴェト・インテリゲンツィヤはすでに、その社会的素性において、生産部面とむすびついている、ということを想起すれば十分である。ソヴェト・インテリゲンツィヤは、労働者層のなかから生長してきたのであり、おそらく彼らを代表するひりびとりは、その一生のうちに、あるいはコルホーズの耕地で，あるいは炭鉱の地下で、あるいは工場の機械について、まさに「労働変換」の方式にしたがって働いたことだろう。ところでこんにち、中等学校を終了したものはそれぞれ、他の専門のすべてにさきだって、少くとも2年間の労働経験と実習期間とを経なければならない。したがって、すべての子供たちがすでにわが国で義務的となっている中等教育をうけるときには、ソ連邦の全労働階級は、成人証明書によってだけでなく、生産的労働実習によっても武装されることになろう。そして、生産部面における労働者の勤務が4～5時間をこえないかぎり、彼はいわゆる非生産部面における知的生活のためにも十分な時間をさけるようになる。各人は、知的生活形態をひとつだけでなく、いくつもあわせもつ形で修得することができるようになる。

しかし、科学と芸術の分野では深い専門化の肩をもつひとびとは、おそらく、知的活動のさまざまな形態のあいだをとびまわっていては、そのひとつでさえ完成に到達することはできない、といってわれわれに反対するだろう。しかしいったいそうであろうか？　もちろん、完全無欠ということは、どのような創造分野であろうと、なかなか到達しがたいものではある。だが、完全性にたやすく近づくのはどんな条件においてだろうか——広汎な活動に参加することによってだろうか、それともせまい活動にとじこもることによってだろうか、大きくそして多面的な集団においてだろうか、それとも個人的探求とひとりぼっちの主観的啓発によってだろうか。——こうしたことはいぜんとして大きな問題である。大きな現代的問題を解決するさいの個人的業績を完全なものであると認める口実は、どんなばあいにもめったにあるものではない。というのは、何よりもまず、科学と芸術の分野がこんにちすでに広大無辺となっているからである。そのようなものを個人的努力によって、ひとりぼっちで修得することは、ちからの及ばぬことである。だが、集団的経験がわれわれに教えていることは、われわれをはるか前方におしすすめてくれるような新しい発見がさまざまの科学のまさに接点において発見されることがはなはだ多いということであり、それゆえにこうした発見は何かひとつの分野のせまい専門によってはもはや達しがたいということである。科学の分野でも、その業績にたいして「大部隊」が計画的に投入されるばあいにだけ、大きな成功がかちえられるのである。

ひとつだけ例をあげよう。宇宙への飛躍という思想にたいしては、かってH.N.キバリチッチがとりつかれ、その後10年たってK.Э.ツィオルコフスキーがとりつかれた。彼らはせまい専門家ではなかったが、ひとりぼっちであった。彼らによって提起された多岐にわたる問題を解決するには、ひじょうにさまざまの武器をもった人々の巨大な集団の参加が必要であった。そして、この問題の解決は、計画的な社会主義経済のもとでのみ、こ

うした集団によってはじめて成功したのである。

科学や芸術においてはこんにちまで、ひじょうに広大な場が、人々の個人的創造にゆだねられていた。しかし、生活そのものが人々を創造的集団のうちに結合しつつある。たとえば、科学の学校と研究所、作家や作曲家や建築家の同盟、演劇集団、オペラ・オーケストラ、教会合唱団，ダンス・アンサンブルなどがそれである。集団の個々の成員は、自己の集団をはなれると自分のもつ社会的価値のすべてをうしなうのである。しかるべき伴奏者なしのソリストでさえ、それをうしなうのである。第2ヴァイオリンやトロンボーンあるいはベースが、オーケストラの外部ではいったいどんな値うちをもつというのか？しかしまた、聴衆なしのオーケストラとか観客なしの演劇あるいはその他の芸術アンサンブルもまた、何に値するというのか？　誰にもよまれない作家、あるいは誰にも理解されない学者の運命が、少なからずみじめなものであることもまたたしかである。そして、これらの集団それぞれの成員のあいだのこうした密接な相互協力関係は、——いずれかの集団の内部にしろ、これらの集団が総じて人類の文化的利益に奉仕するさいにも、——このなかで自己にとじこもるエゴイスティックな個人主義をはびこらせる特別の展望をひらきはしない。

非生産部面を生産部面から区別するもっとも重要な点としてふつう認められているのは、「サービス」と名づけられているその生産物の非物質性である。これらの「サービス」——それは、あれこれの活動形態で人々に提供され、たいていはそれが完成された瞬間に消滅してしまう——は、何らの痕跡もあとにとどめないし、国全体の総生産物総計のうちにさえ算入されない。しかし、「サービス」のもつ非物質性というこの標識は、もはや明らかに不満足なものとなっている。技術の発達につれて、学者や作家の「サービス」はすでに何100万冊という書籍生産物のうちに物質化されるようになり、演劇は映画フィルムのなかで、歌は録音のなかで永久に保存されるようになる等々……。それにもかかわらず、この形態におけるサービスも、物質的生産の全部門が奉仕するところのいっそう単純ではあるがもっとも緊急な人間の肉体的必要とはちがって、主として高い教養をもつ知的・審美的な精神の欲求に奉仕するというあいかわらずの使途をすべてわれわれにのこしているのである。

非生産部面ではこんにちなお、はなはだ多岐にわたるマニュファクチュア型の分業が支配している。しかし、革命的技術はここでもすでにその変革的作用を発揮しつつある。たとえば、美学の分野では映画製作技術がすでに1連の多くの芸術をとらえ、それらの力を自己の工場のなかで組織している。ハリウッドでは、資本のお役に立てられる映画撮影の創作過程がすでにずっと以前から標準化されており、フィルム加工の「コンベアー」システムのうちに流しこまれていた。だがたとえそこでこうしたことが隷属的な映画芸術の思想的衰退をともなっているとしても、このことは高度のアメリカ的技術によって説明されるのではなく、この技術を用いている企業家たちのもつ低級な課題によって説明されるのである。同じ技術が、ソヴェト的条件のもとでは、あらゆる国際的映画祭でますますひん

ぱんに受賞するほど深い思想性と高度の芸術性をもつフィルムを創造させていることは、偶然ではない。科学の分野では、一連の多くの研究所や試験所がまた、こんにちすでに現代的な自動化機構やテレメカニクスのあらゆる成果を装備したまるまるひとつの工場にも匹敵するほどの強力な機械設備——それはベータトロンやチクロトロンから巨人のごときシンクロファゾトロンにいたるまでの巨大な電子計算機構やその他すべてのいっそう複雑なサイバネティクスの奇蹟をともなっている——をもっているのである。このような科学施設は、なお多くはないが、しかし、それは将来の発展の道標となっている。

ひじょうに功妙にできたメカニズムが、いつの日か、脳髄の創造的活動にとってかわることができるとか、何らかの計算・決定作業のなかから工場のボールベアリングに似てさんらんとみがかれたかがやかしい科学上の発見と芸術上の傑作が自動的に吐きだされてくるなどと、考える根拠は何もない。機械はただ、すでに知られたものを再生産するだけで、創り出すことはしない。しかし、物質的生産部面のすべての部門に機械を大量に導入するために創造的思想を拡張再生産することも、十分重んぜられるべき課題である。このような導入過程においてこそ、科学そのものが直接の生産力になるのではないのか。わが国における多数の科学研究所と科学試験所は、すでにずっと前から、工場設計部との直接的協働および基幹部門の生産課題の解決という目的を与えられている。わが国にはすでにさいしょの生産美学研究所が設立されたが、それというのも、この分野ではわが芸術家たちの前にまさに無限の活動舞台がひらかれているからである。

この活動舞台では、西側の世界でも、「美学的」課題が生じた。「ていさいのわるい商品には売れ口がない。こうした商品にひきたつ外観を与えることは、美術家にまかされている」。人民芸術家C．コネンコフのみるところでは、西側の抽象美術家たちの多くが産業界にもぐりこんでしまったということだ。「しかし、——と彼は指摘している、——彼らのしっぽについてゆくことはわれわれにふさわしくない」「芸術の生命における新しいもの、——とこのすぐれた美術家はのべている、——それは、例外なしに生活のすべての面にたいする芸術の全面的滲透作用である。これは何とつよく興味をひき、また夢中にさせることだろうか！　総じて芸術は、なかんずくわれわれになじみのふかい造型芸術は——と彼はつづける、——産業美学においてさいごの断を下さなければならない。工場の外見、機械や労働者の衣服の形と色彩、工場内部の構造——これらすべてが、生産に不馴れで、生産の経験がなく、生産をよく知らないものをすら、たちまち愛着を感じさせ、魅惑してしまわなければならない。産業的企業を美学的に理解するという美術家の仕事がわが国の労働者に与えるものは、人生のわずか1年どころではないと私は固く信じている」。(См. его вдохновенное обращение к молодежи в《Известиях》в номере от12 ноября 1962 года)

さて、われわれの社会的生活行動はどのような方向に発展するのか。何よりもまず、生産部面の「総労働者」にかんする従来の表象がいちじるしく拡張されよう。生産的労働者とならんで、工場の技師のみならず、シベリアのタイガのどこかで新しい埋蔵資源を探索

している地質学者たち、自分の研究所で新しい生産のシェーマとモデルを立案している学者たち、労働や労働結果の生産美学に気をくばっている美術家たちもまた、完全な資格をもって、この概念のうちに包含されるべきである。このようにして、無階級社会における生産部面と非生産部面とのすべての境界はしだいにうすめられ、そしてぬぐいとられてゆく。

このことは、しかし、労働が用いられるさまざまの分野における創造的労働の形態やプロフィールが、いよいよ多様化してゆくということを決して排除しない。創造的労働の形態およびプロフィールの多様性は、物質的生産と共産主義的文化の新しい部門がつぎつぎに発生するにつれて増大さえしてゆくだろう。しかし、知的労働のさまざまのプロフィールあるいはさまざまのつりあいをもつ仕事を、すべての労働種目にたいする来るべき社会の総需要にみあうように部門間で分割することにあてはめたばあいには、この労働の計画的配分のつりあいにかんする問題だけが生ずるにすぎない。ところが、精神労働を分割したり職業的にこまかく専門化したりする問題は、個性の全面的発達の条件のもとでは、もはやその利益をうしなってしまう。というのは、全面的に発達した個性は、いかなるきずなによっても何かひとつのせまい専門にしばりつけられてはおらず、自分の才能のすべてを調和的に発達させるためにある専門と他の任意の専門とをあわせもったり、ある専門を他の専門ととりかえたり、また「労働変換」をすきなだけ広く利用したりすることは、思いのままだからである。

各人の才能を調和的に発達させるという要求を、科学と芸術のあらゆる部門にたいしてひとしい注意とひとしい労働支出をふりむける要求として、はなはだ素朴に理解してならないことはもちろんである。物知りぶっている人が何かを根本的に知っているということは、残念ながらめったにないし、あらゆる皮相なやり方は共産主義にかんするわれわれの表象とまるで調和しないものである。相ことなる人々はさまざまの好みと才能をもっている。そして、各人の調和的発達は、ひとしい発達ではなく、むしろそれぞれの才能に比例した深化と発達を前提している。しかし、生まれたときにはまだねむっている自分の才能と能力のすべてをすぐさま判定することは、誰にもゆるされてはいない。だからこそ、われわれの前にひかれている発達の方向を意識的に選択するためだけではあっても、各人は、できるかぎり広汎な学校教育と総合技術教育の可能性を与えられなければならないのである。全面的で一般的な発達のこうした広い土台の上ではじめて、ある人がこれ以上手をひろげすぎないように、彼の個人的な性向と能力にもっともふさわしい将来の活動の進路にたいしてだけ彼の努力を集中させることは、目的にかなっている。

しかし、いうまでもなく、はてしないものをかかえこむことはできない。だから、ひじょうに教養のふかい将来の人間でさえ、自分の性向にしたがいつつも、個人的発達の途上であれこれの特殊な科学や芸術およびその他の種類の創造活動の方へたえずそれてゆくであろう。

そして、このことがまさに、人類の一般的利益に役立つのである。全社会成員の個人的

才能の多様性が発達するなかで、これらの才能を種々さまざまの組合せのうちに新しく結合し、彼らを理論上および実践上の難問を総合的に解決するための強力な集団のうちに有利に協同化する可能性がひらかれる。

しかし、さまざまの側面をもち総合的な接近を必要とするような課題は、生活の複雑化とともにいよいよ多くなる。同一の課題を解決するための種々ことなった組合せの可性能も拡張されよう。そしてもちろん、多面的に発達した人間は、こうした組合せのいずれかにおいて、ひじょうにさまざまの専門的機能を、——きょうはこの機能を、あすは別の機能を、——遂行することができる。

いいかえれば、このような機能分割あるいは「分業」——われわれは、生産部面における国際分業とか社会的労働の部門間分割とかについて語るばあいに、「分業」という表現をよりひろい意味で用いているのである——の必然性は、社会主義文化部面にものこされている。しかし、このタームをそんなに広く用いることがただよけいな誤解と混乱をまんえんさせるだけだということを考えるならば、つぎのことはつねに想起しなければならないのである。というのは、マルクスは、部門とか部面の全体にわたるような「分業」のうちにまずもって一定の量とつりあいでの社会的労働の配分を見ていたということ、そしてこのタームの本来の意味での「分業」概念のためにはたんに工場とか企業の範囲内にある労働の細分された技術的専門化という意味だけのこしていたということが、偶然ではないということである。

ソ連邦共産党第21回大会における報告のなかで、H.C.フルシチョフが、共産主義について語りつつ、同じターム——労働の配分——を用いたのは偶然ではない。「もちろん、共産主義社会では、——と彼はのべた、——相ことなる生産部門への計画され組織された労働の配分、生産過程の特殊性を考慮した労働時間の社会的規制はあるだろう」(《Внеочередной XXI с'езд КПСС. Стенографический отчет》 Ч. 1, стр. 100, Разрядка моя.—С. С.). 労働の配分と労働時間の規制——ここにわれわれの課題がある。A.クルィレフと彼の支持者が扱うところの「分業」、つまり職業的専門の深化という意味での「分業」については、ここでは何も語られていないが、それというのも、職業的専門化なるものが共産主義の諸条件によって排除されることは、わかりきっているからである。

もちろん、共産主義のもとでも、われわれは、あれこれの機械や自動化ラインのあいだへの生産的諸機能のきちんとした分割をともなうよりいっそうの生産専門化を必要としている。しかしわれわれは、全生涯にわたってわずかひとつだけの労働機能しか遂行できない自動人形の役割を人間に負わせ、人間を不具化してしまうことを、決して必要とはしないのである。

しかし、生産部面と非生産部面とのあいだへの労働配分のつりあいに目を転ずるとき、わが国における非生産部面の割合が、その全体をとってさえ、いまだに全就業人口の18パーセントに達していないということをいわなければならない(《Народное хозяйство СССР в 1961 году》, 1962, стр. 565). だから、そのプロフィールからいって労働がす

でに創造的性格をおびているこの部面内の専門家たち——学者、作家、美術家、——の割合は、なお5分の1ないし6分の1という状態なのである。かくして、分業の運命を扱うときに、この部面についてはさしあたり忘れることができるように思われよう。だが、この点を忘れることができないのは、まさに非生産部面が、その成長において生産部面を追い抜いており、創造的労働のもっとも教養ある幹部がそこでは他のすべての部面よりも急速に増大しているからである。ある2～3のものには、このことが危険とさえ思われるのである。

彼らは、物質的生産の優位ということにひきずられて、非生産的労働の職業を縮少することによって生産部面の拡張を考えたがっている。そしてこのばあい、共産主義とは何であるかが忘れ去られているのはいうまでもない。彼らは、精神労働と肉体労働との分業が一掃されることについても、労働変換法則についても忘れている。肉体労働に従事する労働者ひとりびとりは、工場での数時間の仕事ののち、彼の自由時間をすべて創造的な精神労働にふりむけうる、ということを忘れているのである。逆に、知的職業に従事する人々は、自分の自由時間と自由日には、都市と農村における肉体労働のよろこびに参加することもできるのである。その結果、もはやすべての働き手たちが、ときおりおたがいに交替しながら、ちがった時間ちがった日に、人間にとって必要ないっさいの仕事を遂行するようになろう。人間の物質的必要を充足するためのこうした時間が少なければ少ないほど、増大する精神的欲求全体のためにのこされる時間はいよいよ多くなる。生産的労働部面とか非生産的労働部面とかの断面でも、労働の分割そのものが消滅する。なぜなら、どちらの部面における課題も、同程度に発達した、全面的に訓練された同じ人々によって遂行されるであろうからである。

共産主義的な労働配分の細目のすべてを前もって考察することは、時期尚早である。マルクス主義の古典家たちの言説からの引用をふやしてゆくことは、骨折りがいのないことである。こうした論争は、けっきょくのところ、引用によっては解決されない。われわれをひきつけるのは独断的マルクス主義ではなく、創造的マルクス主義なのであって、われわれはマルクス主義の発展におけるあらゆる成功を歓迎する用意がある。

（中野雄策訳）